第1章：悠久の時と湯けむりの宿

北側の諸国に特有の、骨の髄まで凍てつくような冷たい風が、ようやく止んだ。視界の先には、白銀の世界にぽつりと浮かぶ、湯気をもうもうと上げる古びた木造建築が佇んでいる。知る人ぞ知る秘湯として名高い、山奥の温泉宿だ。雪を踏みしめる音が、静寂の中に吸い込まれていく。

「……寒い」

隣でぽつりと、感情の起伏を感じさせない声がした。振り返ると、分厚い白い防寒着に身を包んだエルフの少女――フリーレンが、あからさまに不機嫌そうな顔で立ち止まっている。トレードマークのツインテールが寒風に揺れ、その先端も心なしか元気がない。千年以上生きる偉大な魔法使いであり、かつて魔王を討伐した英雄の一人。そんな重々しい肩書きとは裏腹に、今の彼女はただの寒がりで、どこか不貞腐れた少女にしか見えなかった。

僕が彼女のかじかんだ手を握り、自身のコートのポケットに入れると、ひやりとした冷たい指先が伝わってくる。冷たかった指先が、僕の体温で徐々に解凍されていくのがわかった。

「……温かい」

フリーレンは少しだけ表情を緩め、無言のまま僕の方へ身体を寄せてきた。普段はドライで、何事にも無関心な彼女だが、こうして二人きりになると、甘える猫のように距離を詰めてくる。彼女は僕のことを呼ぶとき、名前も、「あなた」や「きみ」といった代名詞さえも使わない。ただ視線を合わせ、袖を引き、体温を求めてくるだけ。それが、僕たちの間にある、言葉よりも確かな合図だった。

「もうすぐ宿だよ。温かい温泉と、美味しい食事が待ってる」「ん。……メルクーアブリンはあるかな」「たぶんあるよ。なかったら魔法で出せばいい」「魔法は万能じゃないよ。イメージできないものは出せないし……。でも、期待しておく」

宿の暖簾（のれん）をくぐると、ふわりと硫黄の匂いと、新しい畳の香ばしい香りが漂ってきた。外の冷気とは遮断された、暖かく湿った空気が肌を撫でる。

案内された部屋は、「松の間」。広縁からは雪化粧をした庭園が一望できる、素晴らしい部屋だったが、フリーレンの興味は景色よりも部屋の中央にある炬燵（こたつ）に一点集中していたらしい。重たい防寒着を脱ぎ捨てるやいなや、彼女は骨のない軟体動物のように、吸い込まれるように炬燵へと潜り込んだ。

「……極楽」

卓上に頬を乗せ、だらしなく目を細めるフリーレン。そのあまりにも無防備な姿に、僕は思わず息を呑み、視線を奪われた。防寒着の下は、彼女の普段着である白いワンピース姿なのだが――この世界線におけるフリーレンには、一つだけ決定的な、そして致命的な違いがあった。

それは、その小柄で華奢な身体には不釣り合いなほどに、暴力的なまでに巨大な双丘が備わっていることだ。

普段はローブやマントの厚みで隠されているが、薄着になればその圧倒的な質量は隠しよ

うがない。うつ伏せになったことで、豊かな胸が畳と自身の体重に挟まれ、逃げ場を失ってむにゅりと形を変え、脇の下から横へと溢れ出している。千年の時を経てもなお成長を続けているのか、あるいは何かの魔法の副作用か。その理由は定かではないが、彼女のあどけない童顔と、麻呂眉の浮いた表情とのアンバランスさが、背徳的な魅力を放っていた。布地が悲鳴を上げそうなほど張り詰め、先端の突起が微かに自己主張しているのが見て取れる。

「……なに？　ジロジロ見過ぎ」

熱っぽい視線に気づいたのか、フリーレンが半眼でこちらを見上げる。不快そうには見えない。むしろ、その瞳の奥には、獲物を試すような微かな光が宿っている。

「いや、フリーレンが可愛くて」「……ふん。口が上手いね」

素っ気なく返すが、彼女の長いエルフ耳が、さきっぽだけ赤らんでいるのを僕は見逃さない。彼女は感情が希薄だと言われているが、僕にだけは、こうして微かな、けれど確かな

反応を見せてくれる。

「ほら、温泉に行く前に浴衣に着替えよう。汗かいちゃうよ」「……面倒くさい。魔法で着替えさせて」「だめ。そういうのは風情がないでしょ」「人間の『風情』へのこだわりは、理解に苦しむよ……」

文句を言いつつも、彼女はのっそりと、重そうな身体を引きずるようにして炬燵から這い出してきた。

用意されていたのは、藍色の生地に白い花柄があしらわれた上品な浴衣だった。フリーレンは慣れた手つきで服を脱いでいく。白いワンピースが床に落ち、下着姿になる。

その瞬間、部屋の空気が湿度を増し、重たくなった気がした。透き通るような白い肌、華奢な肩、驚くほどくびれた腰。そして、その中央に鎮座する、重力に逆らうように自己主張する二つの果実。薄いレースの布地ごしに、その淡い桜色の輪郭までもが透けて見えそうだった。歩くたびに、たわわな果実は大きく揺れ、質量を持った波となって視界を揺らす。

「……手伝って」

フリーレンが浴衣を羽織りながら、困ったような顔でこちらを見た。

「帯？」「ん。……前が、閉まらない」

彼女が両手で浴衣の合わせを抑えているが、その胸の規格外のボリュームのせいで生地が大幅に引っ張られ、はだけそうになっているのだ。どれだけ布を寄せても、巨大な膨らみが邪魔をして、合わせ目が弾け飛んでしまう。

僕は彼女の背後に回り、帯を持って彼女の身体に腕を回した。背中から抱きしめるような格好になる。彼女の髪から、微かに甘い花のような香りがした。

「じっとしててね」「……ん」

帯を締めようとすると、どうしても彼女の胸の下、柔らかなアンダーバストのあたりに手が触れる。そのたびに、マシュマロよりも柔らかく、それでいて水風船のような弾力のある感触が手に伝わり、理性が揺らぐ。フリーレンは抵抗することなく、むしろ少し背中を僕の胸に預けるようにして体重をかけてきた。背中に当たる彼女の体温が、じんわりと僕に移ってくる。

「……きつい？」「ううん。……ちょうどいい」

彼女の声が、少しだけ潤んで聞こえた。帯を結び終え、前へ回って襟元を整える。だが、どれだけ整えても、その豊かな谷間は隠しきれず、むしろ浴衣の襟が胸の膨らみに沿って曲線を描くことで、より一層その大きさを強調してしまっている。白い肌と藍色の浴衣のコントラスト。そして、そこから覗く圧倒的な「女性」の象徴。

「……変？」

フリーレンが不安そうに、長い睫毛を揺らして上目遣いで尋ねてくる。

「いや、すごく似合ってる。……ただ」「ただ？」「目のやり場に困るくらい、魅力的だってこと」

僕が正直に伝えると、フリーレンは小さく口元を緩めた。それは、数十年、数百年に一度見せるかどうかの、希少で美しい微笑みだった。

「……変な人。千年以上のババアに欲情するなんて」

彼女はそう言いながら、僕の首に手を回し、爪先立ちをして顔を近づけてくる。吐息がかかる距離。彼女の大きな胸が、柔らかく、押し潰されるように僕の胸板に押し付けられる。心臓の鼓動が、直接伝わってくるようだ。

「でも……嫌いじゃないよ、そういう視線」

囁くような声とともに、彼女の唇が僕の頬をかすめた。温泉に入る前から、僕たちの体温

はすでに上がりきっていた。

「……ねぇ」

フリーレンがとろんとした、情欲を宿し始めた瞳で僕を見つめる。

「温泉、行くんでしょ？ ……それとも、ここでする？」

その言葉は、無垢な問いかけなのか、それとも計算された誘惑なのか。長命種である彼女の時間感覚からすれば、温泉に行く前の少しの情事など、瞬きするほどの時間でしかないのかもしれない。けれど、その誘惑はあまりにも強烈で、今すぐ彼女を押し倒したい衝動に駆られる。

「温泉に行こう。……そのあと、たっぷりと愛させて」

僕がなんとか理性を保ってそう答えると、フリーレンは少しだけ残念そうに、でも嬉しそ

うに頷いた。

「わかった。……じゃあ、早くして。湯冷めしちゃう」

彼女は僕の手を引き、部屋を出る。浴衣の裾から覗く白い足首と、歩くたびに揺れる胸元の景色を網膜に焼き付けながら、僕は彼女と共に廊下へと進んだ。

ーーーーーー

第2章：フェルンの影と、たわわな魔力の果実

脱衣所の籐籠（とうかご）に浴衣が滑り落ちる音が、やけに大きく響いた。冷え切った山の空気が肌を撫でるはずなのに、僕の身体は芯から熱を帯びている。その原因は、目の前に立つ彼女——フリーレンの、あまりにも暴力的な肢体にあった。

「……見て」

彼女は一糸まとわぬ姿で、これ見よがしに胸を張った。ずしり、という重みを感じさせるような動作と共に、真っ白な肌に包まれた二つの巨大な丘が、たっぷんと大きく揺れる。それは、かつて彼女が「貧相」と自虐していた頃の面影など微塵もない、圧倒的な質量だった。血管がうっすらと透けるほどの白磁の肌に、淡いピンク色の乳輪が華を添えている。

「凄いでしょう。……これ、フェルンの解析結果を元に構築したんだよ」

フリーレンは自慢げに、その豊満な胸を下から両手で持ち上げた。むにゅり、と指が白い肉に沈み込み、溢れた肉が指の間からこぼれ落ちる。自らの手ですら支えきれないほどの大きさ。持ち上げられたことで、谷間はいっそう深く、暗い影を落とす。

「フェルンったら、シュタルクに見せつけるみたいに身体を成長させて……。弟子のくせに、師匠より目立つなんて生意気だと思わない？」

彼女は拗ねたように唇を尖らせるが、その瞳は勝ち誇ったような色を帯びている。魔法使いとしての探究心か、それとも単なる女としての意地か。彼女は「胸を大きくする魔法」を

行使し、自らの身体を作り変えてしまったのだ。しかも、元になったフェルンのそれよりも、さらに一回り大きく、感度さえも高めるように調整して。

「……触っていいよ。私が作った傑作、確かめてみて」

誘うような言葉と共に、彼女が一歩近づく。歩くたびに、その重たい果実は左右にブルン、ブルンと暴れ、視覚的な快楽を脳髄に叩き込んでくる。先端の突起は、寒さと興奮でキュッと硬くなり、上を向いて僕を睨んでいた。

露天風呂の湯気は濃く、視界を白く染め上げていた。源泉かけ流しの湯が岩肌を打つ音と、僕たちが湯船に身を沈める水音だけが響く。

「……んっ、あ……」

湯に浸かった瞬間、フリーレンの口から甘く、とろけるような吐息が漏れた。お湯の熱さが、魔法で敏感になった彼女の肌を刺激したのだろうか。彼女は僕の太ももの上に跨るよ

うにして、向かい合わせに座り込んだ。

「……ふふ。お湯に浮く。面白い」

彼女は自身の胸を見下ろして笑った。浮力をもってしても沈みきらない、巨大な双丘。お湯の表面にぷかぷかと浮かぶその様は、白くて柔らかい水風船のようだ。お湯に濡れた肌はさらに輝きを増し、湯気で湿ったツインテールが鎖骨や胸の谷間に張り付いている。雫が胸の膨らみを伝って流れ落ちる光景は、神々しいまでのエロティシズムを放っていた。

「ねぇ、黙ってないで。……感想は？」

彼女が不満げに腰を揺らす。水中でお互いの下半身が擦れ合い、滑らかな肌の感触がダイレクトに伝わってくる。彼女の秘所が、僕の太ももにこすれるたびに、理性が削り取られていく。

「最高だよ。フェルンより……ずっと魅力的だ」「……ん。合格」

満足げに微笑むと、彼女は僕の首に腕を絡め、体重を預けてきた。瞬間、圧倒的な柔らかさが僕の胸板を押し潰す。

むぎゅぅぅ、と音が出そうなほどの密着。布越しではない、素肌と素肌の触れ合い。熱いお湯の中で、彼女の体温と柔らかさ、そして心臓の鼓動だけが鮮明に感じられる。

「……もっと、褒めて。この身体、気に入ってるんだから」

耳元で囁かれる声は、普段の淡々とした口調とは裏腹に、熱く湿っていた。彼女の呼気が耳殻をくすぐり、背筋に電流が走る。千年生きた彼女が、今、ただの女として褒められることを欲している。その事実がたまらなく興奮を煽った。

僕は彼女の要望に応えるべく、その豊満な胸へと手を伸ばした。掌（てのひら）で包み込もうとするが、あまりの大きさに到底収まりきらない。指先に力を込めると、吸い付くような弾力と共に、彼女の身体がピクリと跳ねた。

「……ぁっ、……んんっ……！」

艶めかしい声が、静かな露天風呂に反響する。エルフは感情が希薄だなんて、誰が言ったのか。今の彼女は、僕の指使い一つに敏感に反応し、とろんと蕩けた瞳でこちらを見つめている。指が沈み込む感触。肉の奥にある硬いしこりのような乳腺を探り当てると、彼女はビクンと身を震わせた。

「……そこ、気持ちいい。……魔力回路を、弄られてるみたい」

彼女は僕の手を上から自身の手に重ね、より強く、より深く胸に押し付けてきた。こね回すように揉みしだくと、彼女の口から「はぁ、はぁ」という切迫した呼吸が漏れ始める。紅潮した頬、潤んだ瞳、半開きの口からこぼれる吐息。

「フェルンは、いつもこんな重りを抱えてたんだね……。でも、悪くない重さだ」「顔が赤いよ。のぼせた？」「……違う。のぼせたのは、お湯のせいじゃない」

彼女は潤んだ瞳で僕をねめつけると、僕の耳を甘噛みした。長いエルフ耳が、興奮で真っ赤に染まっているのが見える。

「……責任、取ってよね。こんな淫らな身体にしたのは、誰に見せるためだと思ってるの」

彼女は僕の手を取り、さらに際どい場所――胸の谷間の奥深く、心臓の鼓動が激しく打つ場所へと導く。そこは熱く、湿り、僕を受け入れる準備ができていた。汗ばんだ肌と肌が密着し、離れるたびに粘りつくような音がする。

「ここじゃ狭い。……部屋に戻ろう？　続きは、ベッドの上で」

懇願するように、それでいて命令するように、彼女は僕の唇を奪った。硫黄の香りと、彼女特有の甘い花の香りが混じり合い、理性の最後の留め金が外れる音がした。

湯船から立ち上がると、濡れた身体から滴る雫が、白い肢体を伝って流れ落ちる。月明か

りに照らされたその姿は、千年を生きる魔法使いの威厳などかなぐり捨てた、ただ愛を乞う一人の「女」の姿だった。

ーーーーーー

第３章：白き肉の峡谷と、甘美なる捕食

部屋に戻るやいなや、僕は敷かれたばかりの布団の上に押し倒された。抵抗する間もなかった。いや、抵抗する気など起きなかったと言うべきだろう。視界のすべてが、フリーレンの白く柔らかな肢体によって埋め尽くされていたからだ。

「……もう、我慢できない」

彼女は僕の腹の上に跨ると、浴衣を乱暴に脱ぎ捨てた。露わになったのは、魔法で限界まで増幅された、凶悪なまでの肉体美。照明の光を浴びて艶めく巨大な双丘が、重力に従ってどぷん、と垂れ下がる。その先端、昂ぶりきった桜色の突起が、僕の目の前であからさまに誘惑していた。

「見て。……早く、ここに入れて欲しがってる」

フリーレンは自身の豊かな胸を両手で鷲掴みにし、中央に深い深い谷間を作り出した。フェルンへの対抗心で作られたその峡谷は、男の理性を吸い込む底なしの沼のようだ。

「ん……挟んであげる。……フェルンには真似できない、大人の魔法」

彼女は腰を落とし、僕の猛りきった熱を、その圧倒的な肉の塊で捕獲した。

「――っ！？」

熱い。そして、柔らかい。絹のように滑らかな肌と、内側に詰まった密度の高い脂肪が、僕の楔（くさび）を四方八方から圧迫する。ヌルリとしたローションも魔法も必要ないほど、彼女の肌は汗と愛液で湿り、極上の潤滑油となっていた。

「……ふふ。すごい顔。……気持ちいい？」

フリーレンが腰を前後に揺らし始める。ズプ、チュプ、クチュ…… 肉と肉が擦れ合い、空気が弾ける卑猥な水音が、静かな和室に響き渡る。彼女が動くたびに、巨大な乳房が波のように変形し、僕の視界を白一色に染め上げる。谷間の奥底は、まるで溶鉱炉のように熱く、僕の敏感な部分をねっとりと絡めとる。

「……んっ、あ……っ。……硬い。……血管、浮いてるのわかるよ……」

彼女は蕩けた瞳で見下ろしながら、自身の胸に埋没する僕の一部を愛おしげに見つめた。麻呂眉を八の字に歪め、呼気が熱を帯びる。自分の胸で男を弄ぶことへの優越感と、それによって得られる快感に、彼女自身も酔いしれているようだ。

「フェルンのは……まだ成長途中だもんね。……完成された私の胸のほうが、ずっと……気持ちいいでしょ……？」

嫉妬と優越感がない交ぜになった問いかけ。彼女はわざと胸を強く押し付け、擦り上げるように動く。敏感になりすぎた乳首が僕の胸板を擦り、その刺激で彼女自身も「ひぁっ」と可愛らしい悲鳴を上げた。こすれるたびに、彼女の身体にも電流が走るのか、太ももが小刻みに痙攣している。

「……だめ。胸だけじゃ、足りない」

不意に動きを止めたフリーレンは、欲求不満げに呟くと、僕の腹の上を這うように移動した。ツインテールの毛先が僕の太ももをくすぐる。彼女の顔が、僕の張り詰めた中心のすぐそばに来た。

「……匂い。すごい濃い」

彼女は鼻先を擦り付け、獲物を品定めするようにクンクンと匂いを嗅ぐ。雄の臭いに反応したのか、彼女の鼻翼がヒクヒクと動く。そして、その小さな桜色の唇をゆっくりと開いた。

「……味も、確かめさせて」

ちゅぷ……

遠慮がちな音と共に、熱い口腔が僕の先端を捉えた。最初は確かめるように、舌先でカリカリと裏筋を舐め上げる。ざらついた舌の感触と、唾液のぬくもりが脳髄を揺らす。普段は魔法の詠唱を紡ぐその唇が、今はただ快楽を与えるためだけに動いている。

「……んむ、……ちゅ……れろ……」

魔法の研究に没頭するときの、あの真剣な眼差し。それを今は、僕への奉仕に向けている。彼女は徐々に大胆になり、口を大きく開けて、亀頭を飲み込んだ。

「……んぐっ、……んんっ……！」

喉の奥を突かれる苦しさに、彼女の眉がピクリと跳ねる。だが、彼女は吐き出そうとはし

ない。むしろ、細い指で僕の根元を握りしめ、自分から奥へ奥へと飲み込んでいく。

「……んーーっ、……じゅるっ、じゅぼっ……！」

頬を限界まで膨らませ、頭を上下させる。エルフの小さな口にはあまりにも大きすぎる質量。それを無理やり受け入れる背徳感が、彼女をさらに興奮させているようだった。上目遣いにこちらを見るその瞳は、涙で潤み、完全なる服従と情欲の色に染まっている。喉の奥、食道の入り口あたりまで侵入されている感覚。

「（……大きい。……口の中、いっぱい……）」

言葉にならない声が、喉の振動として直接伝わってくる。吸い上げる吸引力は凄まじく、まるで魂まで吸い取られるような感覚。時折、鼻にかかった「んあ……っ」という甘い喘ぎ声が漏れ、それが最高のスパイスとなって僕を追い詰める。口内の粘膜が熱を持ち、吸い付くように締め付けてくる。唾液が溢れ出し、口の端からボタボタとシーツに滴り落ちるが、彼女は気にする素振りもない。

「……そろそろ、限界？」

僕の腰が浮き、呼吸が荒くなったのを察知したのか、フリーレンが一旦口を離した。唾液の糸が銀色に輝き、僕と彼女の唇を繋ぐ。その糸は切れそうで切れず、二人の情欲の強さを物語っていた。

「出すときは、教えて。……全部、欲しいから」

彼女は艶然と微笑むと、再び先端を咥え、今度は舌を絡ませながら激しくバキュームし始めた。

「……んんっ！　……んぐっ、……ちゅぽっ、じゅるるるっ……！」

先ほどよりも速く、激しいリズム。柔らかい粘膜のひだ、巧みに動く舌、そして締め付ける喉の奥。すべてが快楽の塊となって襲いかかる。彼女の頭を押さえつけたい衝動に駆ら

れるが、彼女は自ら進んで喉奥を開き、僕を受け入れようとしている。

「くっ、出る……！」「……んっ！！」

僕の警告に、彼女は目を見開き、さらに深く咥え込んだ。逃がさない。一滴も無駄にしないと言わんばかりに、喉の奥を大きく開く。

ドクン、と身体が跳ね、熱い奔流が解き放たれた。

「――んぐぅっ！ ……んっ、……ごくっ……！」

喉仏が上下する音が、生々しく響く。彼女はビクビクと脈打つそれを宥めるように、優しく吸い付きながら、溢れ出る白濁を飲み干していく。一度、二度、三度。「ごくん」という嚥下音が、彼女の身体の中に僕の一部が溶けていく合図だった。苦しそうな、それでいて恍惚とした表情で、彼女はすべてを喉の奥へと流し込んでいく。

すべての放出を終えても、フリーレンはしばらく離そうとしなかった。名残惜しそうに舌で先端を清め、最後にもう一度「ちゅっ」と音を立てて吸い付いてから、ようやく顔を上げた。

「……ぷはっ」

口元を白く汚したまま、彼女は気だるげに息を吐く。その表情は、極上の食事を終えた猫のように満ち足りていた。

「……ん。変な味。……でも、身体が熱くなる」

彼女はペロリと唇に残った雫を舐め取ると、僕の胸の上に突っ伏してきた。心臓の音が重なり合う。僕の魔力ならぬ生命力を吸い取った彼女の肌は、さっきよりも艶やかに輝いていた。

「……どう？　フェルンより、上手だった？」「世界一だよ」と伝えると、彼女は「……知っ

てる」と小さく呟き、僕の首筋に顔を埋めた。

「……魔力、充填完了。……でも、まだ足りないかも」

彼女の指先が、再び僕の肌の上を這い回る。その瞳の奥には、まだ消えぬ情欲の炎がゆらめいていた。

「次は……私が気持ちよくなる番。……いいよね？」

第4章：聖なる雫と、焦らしの拷問

「……まだ、お腹空いてるでしょ？」

一度目の絶頂を迎え、少し気だるげに横たわっていた僕を、フリーレンが上から覗き込んでくる。その瞳は慈愛に満ちているようで、どこか嗜虐的な光を宿していた。天井の照明を背に受けた彼女は、逆光の中で神々しいまでの輪郭を浮かび上がらせているが、その行動は慈母というにはあまりにも淫らだった。

彼女は自分の巨大な胸を両手で持ち上げると、ずしりと重そうなそれを僕の顔の真上に持ってくる。視界のすべてが、圧倒的な白い肌色で完全に埋め尽くされた。鼻先をかすめる甘い乳臭い匂い。

「……これ。オプションで追加しておいたの」

彼女がムギュ、と豊満な肉を指で強く圧迫する。白い肌に指が深々とめり込み、張り詰めた桜色の突起が限界まで充血する。すると、その先端からじわりと白い液体が滲み出し、表面張力でぷるんと震えた後、重力に負けて雫となり、僕の唇にポタリと滴り落ちた。

「――っ！？」

「……飲んで。魔力を変換して作った、特製のミルクだよ」

驚く僕をよそに、彼女はそのまま重たい乳房を僕の顔に押し付けた。「んむっ……！」鼻

と口が、柔らかく温かい肉の圧力によって塞がれる。呼吸ができないほどの密着感。甘いミルクの香りと、彼女特有の花のような体臭、そして少し汗ばんだ肌の匂いが混ざり合い、脳が麻痺しそうだ。

「……んっ、……よしよし。……いい子」

彼女は僕の頭を抱きかかえ、まるで赤子をあやすように優しく撫でる。視界は闇。ただ、唇に触れる突起の感触だけが鮮明だ。僕は本能に従い、目の前のそれに吸い付いた。

チュパッ、……ジュルッ、ゴクッ……

口の中に広がるのは、濃厚でコクのある甘み。現実の母乳とは違う、高純度の魔力そのものを液状化したような、飲むだけで身体の芯が痺れるような不思議な昂揚感をもたらす味だ。僕が舌を絡ませて強く吸うたびに、フリーレンの背中がビクンと跳ねる。

「……んあぁっ！……っ、すごい吸引力……。……ふふ、そんなに美味しかった？」

彼女は恍惚とした表情で、自らの胸が貪られる快感に浸っている。吸われる刺激が乳腺を通って子宮にまで響くのか、僕の顔を挟んでいる彼女の太ももが、時折ピクリと痙攣し、僕の頭を強く締め付けた。

「……フェルンには、まだ早すぎる魔法だね。……大人の私だけが、あげられるご褒美」

彼女は勝ち誇ったように囁くと、もう片方の胸も僕の口元へと運んだ。左右の巨大なタンクから溢れ出る甘い蜜。喉を鳴らして飲み下す音が、静かな部屋に響く。僕はただ、その暴力的なまでの母性と魔力の供給に溺れることしかできなかった。

「……いっぱい飲んでくれて、嬉しいけど。……まだ、出し切れてないみたいだね」

授乳を終え、僕の口元についたミルクを親指で丁寧に拭い、それを自分の口でペロリと舐め取りながら、フリーレンが視線を下に移す。そこには、先ほどの絶頂から回復し、彼女の魔力ミルクの効果でさらに硬度を増して鎌首をもたげた僕の欲望があった。

「……元気なのはいいことだよ。……じゃあ、次はこれで抜いてあげる」

彼女は跨ったまま、ミルクで濡れて滑りやすくなったその巨大な双丘で、僕の熱を再び挟み込んだ。ムニュゥゥ……という肉の音がして、僕の視界から自身のイチモツが消え失せた。

「……んっ！ ……ぬるぬるして、気持ちいい……」

ローション代わりのミルクが、摩擦を極限まで減らし、とろけるような滑らかさを生み出している。先ほどのパイズリとは違う。今度は「液体」が介在することで、密着度が段違いだ。皮膚の吸着感が凄まじい。

ニチャ、グチュ、ズブッ……

卑猥な音が、部屋の空気を湿らせる。彼女は手を使わず、わざと体重をかけ、胸の脂肪の重みと筋肉の動きだけで僕を押し潰すように動く。

「……見て。……胸に埋もれて……全然見えない」

フリーレンは自身の胸を見下ろし、サディスティックに笑った。巨大な肉塊の圧力。四方八方から締め付けられる圧迫感。そして、視覚を焼き尽くす圧倒的な質量。彼女が動くたびに、ミルクの白と桜色の乳首、そして白い肌が混ざり合い、極彩色の快楽を描く。

「……っ、くうっ……！」「……ここ、いいんでしょ？ ……カリのところ、いじめてあげる」

彼女は巧みに胸の筋肉を動かし、一番敏感な部分をグリグリと刺激する。そのたびに、僕の腰が勝手に跳ね上がる。彼女の顔が近い。熱い吐息が降り注ぐ。

「……いっちゃえ。……私の胸に、全部ぶちまけて」

彼女が動きを早める。ミルクと混ざり合う熱。限界を超えた刺激。

「――っ、出るっ！！」「……んんーーっ！ 受け止めてあげるっ！」

ドクンッ、と激しい脈動と共に、二度目の解放が訪れた。白濁した熱い液体が、彼女の美しい谷間に勢いよく放たれる。フリーレンは逃げることなく、顔を赤らめながら、その全てを白い肌と谷間で受け止めた。飛び散った飛沫が、彼女の鎖骨や顎にまで達する。

射精の余韻に浸り、荒い息をつく僕。だが、フリーレンはまだ終わっていなかった。彼女は胸元を汚した白濁とミルクを、指ですくい取って舐めると、とろりと糸を引く指先を妖艶な手つきで自身の下腹部へと伸ばした。

「……すごかったね。……でも」

彼女がゆっくりと腰を浮かせ、乱れた浴衣の裾を大きく広げる。そこには、すでに愛液でぐっしょりと濡れそぼり、期待に震える秘所が露わになっていた。透明な蜜が太ももを伝い、シーツにシミを作っている。

「……本番は、これからだよ」

彼女は僕の先端――まだ敏感なままのそれに、自身の濡れた入り口をあてがった。カリの先端と、蜜壺の入り口が触れ合う。熱と熱の接触。挿れれば極楽に行けるとわかっているのに、彼女はそこから動かない。

「……入れて、欲しい？」

上目遣いに、意地悪な問いかけ。彼女の秘肉が、ヒクヒクと渇望するように収縮し、僕を招き入れたがっているのが見える。入り口がぬるりと僕を誘うが、彼女はまだ許さない。じらすことを楽しんでいる。

「……お願いして。……千年の魔法使いを、私だけのものにしたいって」

彼女の爪先が、僕の胸板を甘く引っ掻く。焦らされる快感と、これから始まる行為への期

待で、心臓が破裂しそうだ。

「……フリーレン、お願いだ。……中に入れたい」「……ん。……よくできました」

彼女はとろりと蕩けた笑顔を見せると、ゆっくりと、本当にゆっくりと腰を沈め始めた。

「……受け入れてあげる。……私の、一番深い場所へ」

先端が、ぬぷりと飲み込まれていく。その感覚は、今までのどんな魔法よりも神秘的で、抗えない引力を持っていた。

ーーーーーー

第5章：悠久の時を越えて、中で果てる

「……んっ、……ぁあぁっ……！」

フリーレンが天井を仰ぎ、細い喉を反らせて絶叫した。焦らされ続けた彼女の秘所が、ついに僕の全てを根元まで飲み込んだ瞬間だった。きつい。あまりにもきつい。魔法で強化された彼女の肉体は、内部の締め付けすらも規格外だった。まるで熱を持った無数の触手が、侵入者を捕らえて逃がさないとばかりに、四方八方から吸い付いてくる。

「……すごい。……奥まで、入ってる。……私の深いところ、全部でいっぱい……」

彼女は涙で潤んだ瞳を下ろし、繋がっている部分を見つめた。僕たちの結合部は、彼女の溢れ出る愛液と先ほどのミルク、そしてローション代わりの白濁でぐしょぐしょに濡れ、動くたびに「ジュブッ、ヌチュッ」という卑猥な音を奏でている。埋まっている部分が見えないほど、彼女の秘所は僕を深く呑み込んでいた。

「……動いて。……私を、めちゃくちゃにしていいから」

彼女が両脚を僕の腰に絡め、踵（かかと）で背中をトンと叩く。それが合図だった。僕は理性のタガを完全に外し、本能のままに腰を打ち付けた。

「――っ、くっ！」「……ぁっ！　んあぁっ！　……っ、ふぅっ、……んんっ！」

突き上げるたびに、フリーレンの巨乳が激しく波打つ。その暴力的なまでの揺れが、視覚的な快楽となって脳髄を焼き尽くす。彼女の小さな身体が、僕の衝撃で揺さぶられ、布団の上を少しずつずれていく。

「……はぁっ、はぁっ、……深いっ、……そこっ、……んあぁっ！」

普段の冷静な彼女からは想像もできない、甘く高い嬌声。それは千年を生きた大魔法使いの声ではなく、ただ快楽に翻弄される一人の「雌」の悲鳴だった。髪が乱れ、汗が飛び散り、彼女の表情は快楽でくしゃくしゃに歪んでいる。白目を剥きそうになりながら、それでも僕を求めて腰を振る。

「……キス。……キスして」

激しいピストン運動の中、フリーレンが必死に腕を伸ばし、僕の首に抱きついてきた。僕は動きを止めず、彼女の唇に覆いかぶさる。

チュッ、……んむ、……レロッ、……ジュルッ……

下半身で激しく繋がりながら、舌と舌もまた、濃厚に絡み合う。彼女の口内は熱く、甘く、僕の唾液を貪るように吸い付いてくる。息継ぎも忘れて、何度も、何度も角度を変えて唇を重ねる。唾液が混じり合い、口の端から銀色の糸となってこぼれ落ちる。

「……んっ、ぷはっ。……ん、……好き。……大好き……」

唇が離れた一瞬の隙に、彼女が小さく呟いた。名前も呼ばない。愛の言葉も滅多に口にしない彼女が、絶頂の最中に漏らした本音。その言葉が、僕の中で何かが弾ける引き金となった。

「フリーレン……っ！」「……んぁっ！……もっとっ！……奥、もっと突いてっ！」

僕は彼女の腰を掴み、さらに激しく、獣のように腰を振る。彼女の中のヒダが、僕のカリを擦り、しごき、快楽の波状攻撃を仕掛けてくる。最奥の子宮口をノックするたびに、彼女の身体がビクン！と弓なりに跳ね、内壁がキュウゥゥと収縮して僕を締め上げた。「魔法が、暴走しちゃうっ……！」とわけのわからないことを口走りながら、彼女は僕の背中に爪を立てる。

「……ああっ、だめっ！ ……頭、おかしくなるっ！ ……んあぁぁっ！」

彼女の瞳の焦点が合わなくなってくる。口からは涎が垂れ流しになり、完全に快楽に支配されていた。それほどまでに、彼女は感じてくれていた。

「……もう、いく。……一緒に、いこう……？」

フリーレンが耳元で、懇願するように囁く。その声はかすれ、熱に浮かされている。僕ももう限界だった。彼女の極上の膣肉に締め上げられ、暴発寸前のエネルギーが奔流となっ

て出口を求めている。

「出すよ、フリーレン……！　中にっ……！」「……んっ！　……出してっ！　……全部、私の中にちょうだいっ！」

彼女が最後の力を振り絞り、腰を突き上げて迎撃体勢をとる。最奥で、最も深く繋がる位置で、僕たちは同時に限界を迎えた。

「――っ、うあぁぁぁっ！！」「――んんんーーーーっ！！！！！　ぁああっ！！」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ！

僕の身体が大きく痙攣し、熱い熱い白濁の奔流が、彼女の胎内へと勢いよく解き放たれた。一度では終わらない。二度、三度と脈打ち、魂を削り取るようにして注ぎ込む。

「……んぐっ、……ああっ、……熱いっ、……入ってきてるぅっ……！」

フリーレンは身体をガクガクと震わせながら、その全てを受け止めていた。彼女の膣壁がリズミカルに収縮し、最後の一滴まで搾り取ろうと吸い付いてくる。僕の放出した種が、彼女の最奥を満たし、子宮へと注がれていく感覚。それは、言葉では言い表せないほどの、圧倒的な多幸感と所有感だった。

長い長い絶頂の余韻が過ぎ去り、部屋には二人の荒い呼吸音だけが残った。僕は彼女の上に覆いかぶさったまま、脱力していた。まだ繋がっている。時折、後引く快感で彼女の中がピクピクと痙攣し、僕を優しく締め付ける。

「……ふぅ。……はぁ……」

フリーレンの呼吸が次第に整っていく。汗で濡れた前髪を優しく払いのけると、彼女はとろんとした瞳で僕を見つめ、満足げに微笑んだ。

「……気持ちよかった？」

彼女が小声で聞いてくる。

「ああ、最高だった。……人生で一番」「……ん。私も」

彼女は僕の頬に手を添え、愛おしげに撫でた。

「……魔力の供給以上に、満たされた気がする。……こういう時間も、悪くないね」

彼女は身体をもぞりと動かす。結合部から、ジュルリと音がして、僕たちが離れる。その瞬間、白濁した液体が彼女の秘所から大量に溢れ出し、シーツを汚した。僕が注ぎ込んだ量があまりにも多く、彼女の小さな身体では受け止めきれなかったのだ。

「……あーあ。こんなに出して」

フリーレンは溢れたソレを指ですくい、恥ずかしそうに、でも誇らしげに見せた。指先か

ら糸を引くそれを、彼女はまたペロリと舐める。

「……責任取って、また綺麗にしてよね。……あとで」

「あとで？」「うん。……今は、このまま」

彼女は僕の胸に顔を埋め、ギュッと抱きついてきた。その大きな胸の柔らかさと、体温の温もりが、心地よい眠気を誘う。窓の外では、雪が静かに降り積もっている。湯けむりの宿で過ごした熱い夜は、二人の記憶に永遠に刻まれることだろう。

僕は彼女の温もりを感じながら、静かに目を閉じた。

ーーーーーーー

エピローグ：朝陽に溶ける残り香と、永遠の契約

障子の隙間から差し込む朝日が、瞼を刺した。重い。身体が鉛のように重いけれど、それ

は不快な重さではなかった。胸元に感じる温かい重量感と、鼻腔をくすぐる甘ったるい匂い――栗の花に似た雄の匂いと、彼女特有の花のような体臭が混ざり合った、濃厚な情事の残り香。

「……んぅ……。……まだ、起きない……」

胸元で何かがもぞりと動いた。目を開けると、そこには至福の光景があった。フリーレンが、僕の胸を枕代わりにして、安らかな寝息を立てている。掛け布団は半ばはだけており、昨夜、僕が愛し抜いたその白い肢体が露わになっていた。

首筋や鎖骨、そして豊満な乳房には、僕がつけた赤いキスマークがいくつも散らばっている。それはまるで、真っ白なキャンバスに描かれた独占の証のようだ。

「……ふふ。……私の、すごい形になってる……」

彼女がうっすらと目を開け、自身の胸を見下ろして寝ぼけ眼で笑った。魔法で大きくした

双丘は、重力に従って左右に流れ、僕の身体を覆い尽くしている。その先端、桜色の突起はまだ少し充血しており、昨夜の激しさを物語っていた。

そして何より扇情的なのは、彼女の秘所だ。シーツには、昨日僕が注ぎ込んだ大量の白濁が、黄色い大きな地図のような染みとなって広がっている。さらに、彼女の太ももの内側には、一晩経ってなお溢れ出た愛液と種が、カピカピに乾いて張り付いていた。彼女が動くたびに、乾いた音がして、昨夜の記憶を呼び覚ます。

「……汚しちゃったね」「……ん。……のせいだよ。……あんなに出すから」

フリーレンは咎めるような口調だが、その表情はどこか嬉しそうだ。彼女はわざと、乾きかけた白濁を指でカリカリと引っ掻いた。

「……この匂いがする。……身体の奥まで、この匂いでいっぱい」

「……シャワー、浴びてくる？」「……やだ。……寒い」

フリーレンは僕の首に腕を回し、さらに強く抱きついてきた。素肌と素肌が密着する。彼女の肌は少し汗ばんでおり、ペタペタと吸い付くような感触が心地よい。朝の冷たい空気の中で、布団の中だけが南国のように温かい。

「……もう少し、このまま。……余韻に浸らせて」

彼女が僕の耳元に顔を埋め、深く息を吸い込む。スゥーッ……ハァ…… 熱い吐息が鼓膜を震わせ、背筋にぞくりとした快感が走る。

「……んっ。……また、大きくなってる」

僕の下腹部の変化に気づいた彼女が、太ももを擦り寄せてきた。朝特有の生理現象とはいえ、彼女の柔らかいお腹と、ふっくらした恥丘が当たれば、反応しないわけがない。いや、むしろ彼女の匂いを嗅いだだけで、僕の身体は再び戦闘態勢に入っていた。

「……元気だね。……昨日のあれだけじゃ、足りなかった？」

彼女の手が、シーツの下へ滑り込む。慣れた手つきで、硬くなったそれを握りしめた。

「……っ、フリーレン」「……ふふ。ピクピクしてる。……可愛い」

彼女は握る強さを変えながら、ゆっくりとしごき始めた。まだ朝の気だるさが残る頭に、鋭い快楽が突き刺さる。彼女の手のひらは温かく、昨夜のことを思い出させるように優しく、時に激しく動く。

「……朝から、えっち。……でも、嫌いじゃないよ」

彼女は上半身を起こすと、覆いかぶさるようにしてキスをしてきた。昨夜よりも優しく、甘い、おはようのキス。唾液の味がする。朝の口臭さえも、互いの愛おしさを増幅させるスパイスになる。

しばらくの間、二人は布団の中でじゃれ合い、互いの体温を確かめ合った。窓の外では小鳥がさえずっているが、ここだけは時間が止まっているようだ。

「……ねぇ」

フリーレンが僕の胸に頬を乗せたまま、ぽつりと呟いた。

「……エルフの一生は長いよ。人間にとっては、想像もつかないくらい」

彼女の指先が、僕の心臓の上をなぞる。ドクン、ドクンという鼓動を確かめるように。

「……昔は、その長さが退屈だった。……でも、今は違う」

彼女は顔を上げ、透き通るような緑色の瞳で僕を射抜いた。そこには、千年の時を経た賢者の顔ではなく、恋する乙女の顔があった。

「……こういう時間は、一瞬だけど……永遠みたいに濃い」

「……フリーレン……」

「……だから、責任取ってよね。……その寿命が尽きる最後の瞬間まで、私を気持ちよくして」

それは、彼女なりのプロポーズであり、絶対的な契約の言葉だった。彼女は僕が死ぬまで、そして僕が死んだ後も、この記憶を抱いて生きていく覚悟を決めているのだ。

「……あーあ。また濡れてきちゃった」

彼女が自嘲気味に笑い、自分の下腹部を指差す。僕の愛撫を受けたわけでもないのに、言葉を交わしただけで、彼女の秘所からは透明な蜜がじわりと滲み出し、シーツの汚れをさらに広げていた。愛の言葉への興奮が、即座に身体反応として現れている。

「……身体が、覚えちゃったみたい。……どうしてくれるの？」

彼女は妖艶に微笑むと、再び僕の上に跨った。豊かな胸が揺れ、甘い匂いが鼻孔を満たす。

「……朝ごはんの前に、もう一回。……おかわり、いいよね？」

拒否権など、最初からなかった。僕たちは再び重なり合い、湯けむりの宿に、甘く激しい愛の音色を響かせた。差し込む朝陽が、絡み合う二人の影を長く伸ばしていた。

悠久の時を生きる彼女にとって、この旅の記憶は、宝石よりも輝く「たった数日間の永遠」となったのだった。

～完～